

山口大学構内吉田遺跡の調査の経緯

小野 忠 熙

吉田遺跡の遺跡名は、山口市大字吉田にある山口大学統合移転地の遺跡群の総称である。この地が、弥生時代から古墳時代の遺物散布地であることが知られるようになったのは、1952年からのことである。

発掘調査の端緒は、1966年6月、統合移転地の循環道路の工事中、弥生時代の遺物包含層に掘り当たったことに始まる。筆者が調査の要請をうけたときには既に農学部と教養部の学舎が大部分建っており、他の土地は水田の畦畔が粗くブルドーザーで引きならされた程度の状態であった。

調査はキャンパス全域を対象に、地下に埋存する遺構や遺物包含層を組織的に地表から探査する予察調査と、工事中に掘り当たった循環道路と、その延長部分の側溝工事場の発掘調査から始めた。これについて、1967年の2月から3月にかけて約1ヵ月間、工事を急

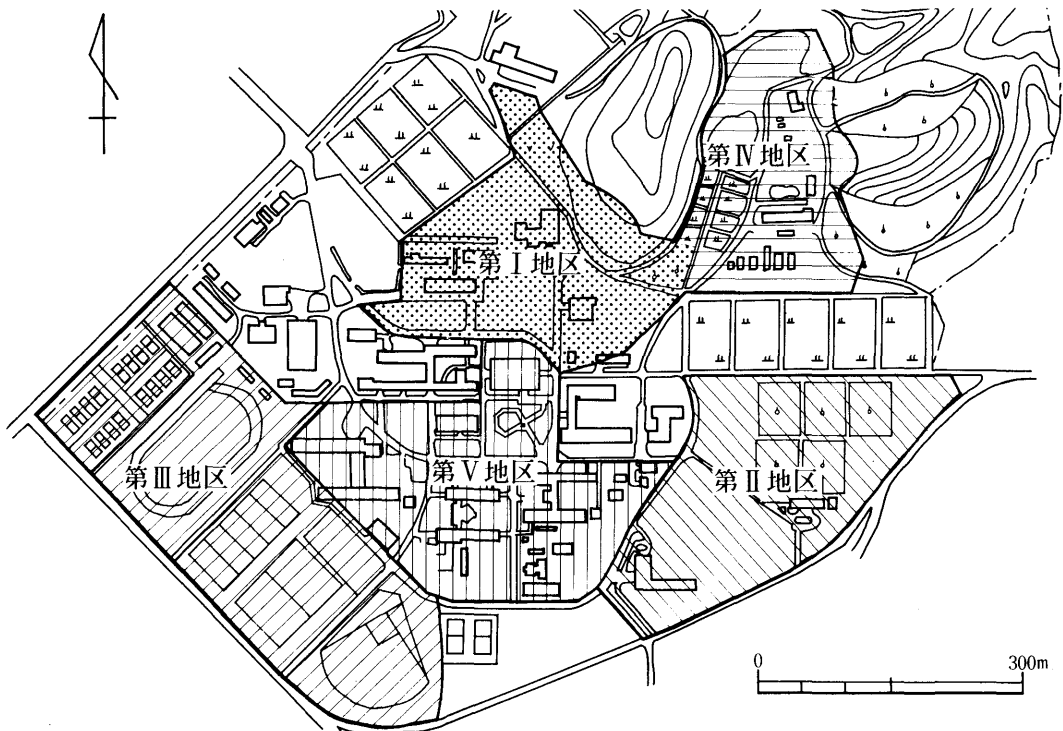


Fig. 30 山口大学構内吉田遺跡の調査地区分図

ぐ広いグラウンド予定地の発掘調査を行い、3カ所の村落跡と往時の小川跡を掘り出し、古代の条里遺構とみられる杭列なども調査した。ほぼ1カ年にわたる組織的地表探査と一部の発掘調査により、弥生・古墳の両時代を主とする遺跡がキャンパスの地下に点在することがわかったので、同年6月、市川禎治学長を団長とする山口大学吉田遺跡調査団を組織し、本格的に取り組むことになった。

調査団の組織は、適正な調査の遂行と調査後の報告書の作成を考慮に入れ、学術面で学外の顧問と特別調査員、学内から調査主任と各専門分野の調査員や、直接現地で作業する調査協力者とならなり、事務部面では、特別調査員と事務総括主任や幹事とで編成され、行政面で山口県教育委員会と山口市教育委員会の援助をうけ、学長が調査団長としてあたることになった。

調査に当たっては、予察調査の結果にもとづいて工事予定地を第Ⅰ地区から第Ⅴ地区の5地区に分け、直接土地が改変される校舎・運動場・農場・道路・水路と付設建築物の敷地について、遺跡の分布と工事の順序を考慮に入れ、緊急の度に応じ、1973年までの間順次発掘調査を実施した。

調査の結果、^{いまやま}今山の麓にひろがる大学構内の洪積段丘と、一段低い低平な沖積段丘にかけて、縄文時代の晩期から弥生・古墳両時代の先原史時代と、古代・中世・近世にわたる有史時代の遺構の分布が明らかになった。その主体は、農耕社会が展開した原史時代に疎らに点在していた小村落の跡や、蛇行する小川の跡などで、内部から多くの土器と少量の石器や金属器とともに、木製の鋤や植生を示す樹木と種子などの植物遺体を検出し、往時の生活相と景観を復元することができる資料を得ることができた。²⁾

長期にわたる調査の間、調査団長に市川禎治・力武一郎・中村正二郎の各学長、顧問の東京大学教授齊藤忠・広島大学教授今村外二の両氏をはじめ、それぞれの専門分野にかかわる京都大学教授福山敏男・学習院大学教授木越邦彦・早稲田大学教授直良信夫・東京大学教授亘理俊二・北九州市立大学助教授畑中健一の諸氏の助言を得、本学の関係分野の研究者浜田清吉・高橋英太郎・三坂圭治・徳光直・中田清一・山本武夫・河野通弘・三輪正房・高木恭介・佐藤史・堂面春雄・八木充・勝本謙の諸氏からなる調査員と、代々の事務局長や庶務・経理・施設の各部長と幹事の庶務課長ら諸氏の協力を得ながら、文化会考古学部員や地理学談話会員と地元民の助力を得て小野忠熙が現地の調査を担当した。なお調査協力者として、一時山口県教育委員会から森江直紹氏が派遣され、支援をうけることができた。

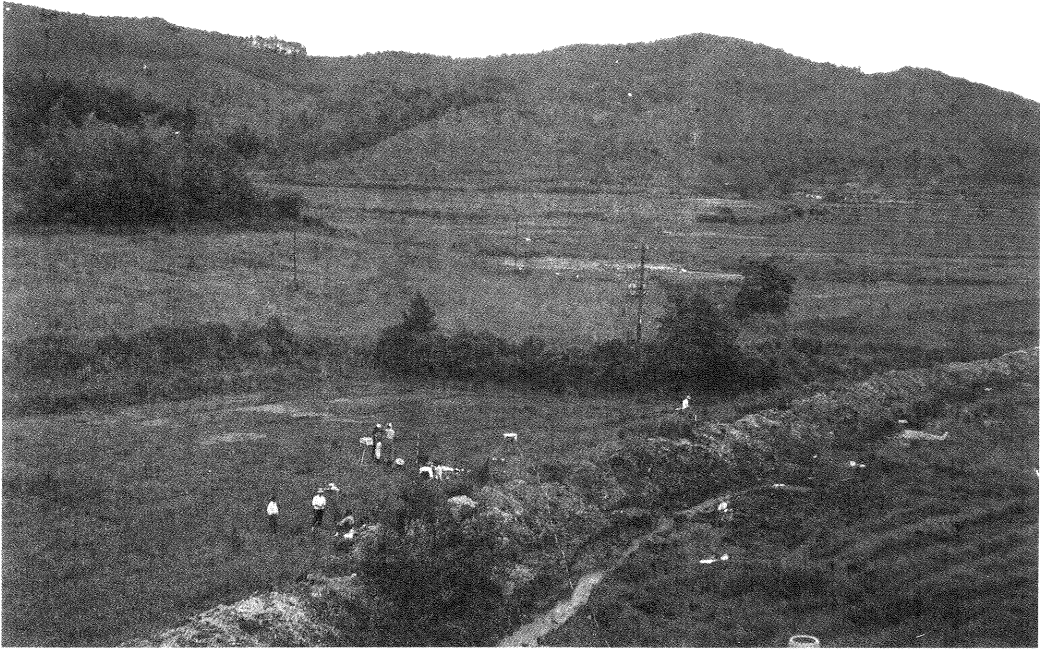


Fig. 31 第I地区A区の調査風景

1973年11月には統合移転が終ったことから、吉田遺跡調査団による調査は終り、爾後整備拡充に伴う遺跡調査に切替えられることになった。

調査によって検出された遺跡のうち、高い視点からみて保存に値する遺構として、第一学生食堂の南に接した原史時代の村落跡（第Ⅲ地区の北区）を指摘することができたので、協議のうえ現地で保存することになり、1976年8月史跡庭園として暫定的な整備が行われた。

当時、上記の村落跡の現地保存を考えたのは次のような理由からであった。すなわち、遺跡の示す特質が、日本の古代国家形成の前夜のころの、西日本の一般的な農村集落の標本的資料であり、建築様式が弥生時代の円形住居から古墳時代の方形プランへ、竪穴式から平地式へへて高床式へと推移する民家建築の変遷を知るうえの資料を提供していること。しかもその場所が大学の構内であることから、学問の府にふさわしい野外博物館として、原始家屋の復元と、吉田遺跡から出土した流木や、シイ・モモ・クルミなど植物遺体の樹種や種子から弥生の森の植生を再現し、四季折々、季節の移り変わりを直感できる教育資料として役立つと同時に、学生たちの憩いの場として活用することができると考えたからであった。³⁾

統合移転が完了して大学の機能が円滑に営まれる時がおとずれ、環境整備の一環として活用される日まで埋置しておくことになったが、その後、1976年から1977年ごろ、一部に、埋蔵文化財を大学建設の障害物とみて保存地区の遺跡を撤去し、校舎の用地として利用せよとの強い議論が起きたが事なきを得た。1987年に至り、村落跡の保存措置を考慮した再発掘による調査が行われたことは、所期の目的の具体化であり有意義なことである。

現地調査の結果は年次ごとに発掘調査概要を提出する一方、調査の当初から終了後に作成する正式の調査報告書を念頭におき、予想される構想をえがいて調査篇と考察篇からなる目次の試案を作った。その後発掘調査が進むにつれて訂正を重ね、統合移転が終了した1975年の末、発掘現場に関係の少ない考察篇担当の調査員の方々に執筆が依頼せられた。

発掘調査に携わった考古班は、調査の前半ごろまで、経済学部⁵⁾の旧学舎の一部を借用していた山口大学古代遺跡調査室⁶⁾を本拠にし、島田川流域の遺跡調査以来の県内外の考古資料の収納と、吉田遺跡出土の遺物の収容と作業ができたのであったが、経済学部が吉田キャンパスへ移転した後は収納と作業の場所を失い、夥しい遺物は、臨時に中央図書館の一部と本部棟の地下の仮設物置場などに分散して収納されたため、作業を停止せざるを得ない状態に陥った。

このような事態の到来をかねてから想定し、文部省へ山口大学埋蔵文化財資料館の新設を申請し、1973年に200㎡の許可を受けることができた。しかしこの年第一次オイルショックによる経済事情の激変にあい、建築が延期されることになった。1976年になって杉村敬喜事務局長の尽力により再度申請し、先回と同額の交付を受けたのであったが、その間に物価が上昇したため目減りし、1977年の3月現在の資料館の竣工をみることができた。

資料館の建設を提言した当時、真理を探求し真実を究明する大学は、文献の殿堂としての図書館と、実物を直接観察することができる博物館の両者が機能してこそ真の大学であり、その第一歩として、当面急を要する埋蔵文化財の資料館を建てねばならぬと考えた。小さな橋頭堡的存在ではあるが、ゆくゆくは人文・社会科学と自然科学の貴重な学術上の資料を収蔵展示して活用する大学博物館へと拡充増設し、全学共同の研究施設となる日を構想して、中央図書館と道一つ隔てた場所に建設することになったのである。

正式の報告書の出版に先きだち、キャンパス内の遺跡の理解を授ける一助として、1976年12月に小冊子の『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』を作成し、正式報告書の刊行が軌道にのったかみえたのであったが、中村学長の再任が決まり年度末が迫った1977年の3月以降、報告書の刊行不要論が起こるといふ不測の事態に遭遇し、暗礁に乗りあげ見通



Fig. 32 第Ⅲ地区南北両区の調査風景

しが見つかなくなった。9月筆者の配置替えによる転出が決まり、12月4日には調査団長の中村学長が急逝されるという不幸な事態が生じた。学長逝去後、調査団長の遺志をうけた若菜昭彦事務局長の要請により、1977年の暮れから正式報告書の刊行を目途に作業計画を練りなおした。翌年の1月学外から考古学研究者の協力を得て再度作業にかかったのであったが、膨大な遺物と実測図のうえ、公務の傍らあたねばならぬという極めて困難な条件下での作業であり、間もなく大学事務局からも連絡が途絶え、自然休眠に入り15年が経過した。

現地調査の間、わざわざ臨地の指導を賜った顧問の斉藤忠教授をはじめ、調査に直接間接専門の分野で関与された大学内外の調査員の方々、発掘調査に携わり、困難な事情のもとで遺物の整理にあたった学外からの協力者、文化会考古学部員や地理学談話会員の諸君の一方ならぬ労苦と、本部の事務局や山口県・山口市両教育委員会の配慮に対し、調査担当者の一人として心から謝意を表し、正式報告書の刊行ができなかったことへの遺憾の辞を述べねばならない。

1992年の春にいたり、埋蔵文化財資料館長の近藤喬一教授から、吉田遺跡の遺物や実測図などの整理を行い、正式報告書の作成にかかりたい旨の連絡があり、1992年度には、館

山口大学構内吉田遺跡の調査の経緯

長をはじめ豆谷和之氏ら館員の努力により、諸種の困難を克服して第Ⅰ地区の報告書が公刊される運びになった。その好意ある配意と、並々ならぬ労苦に衷心から敬意と謝意を表する次第である。

[注]

- 1) 1966年当時山口大学の学生であった村田益男と三浦肇（現本学名誉教授）の両氏により、山口盆地一帯の遺跡分布図の作成を目的とする地表探査が行われた際に発見された。
- 2) 小野忠熙「山口大学構内吉田遺跡」（『考古学ジャーナル』第9号、ニューサイエンス社、1967年）
小野忠熙「山口大学構内吉田遺跡の性格」（『学園だより』第6号、山口大学、1970年）
小野忠熙編『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』山口大学吉田遺跡調査団、1976年
- 3) 注2)
- 4) 河村吉行「山口大学構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』山口大学埋蔵文化財資料館、1986年）
河村吉行「山口大学構内遺跡保存地区発掘調査（昭和59年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』山口大学埋蔵文化財資料館、1987年）
河村吉行「吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和60・61年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』山口大学埋蔵文化財資料館、1990年）
- 5) 日本考古学協会編『日本考古学辞典』（東京堂、1962年）
- 6) 1950年から始まった松山基範学長を団長とする島田川流域の遺跡調査の遺物。
小野忠熙編『島田川一周防島田川流域の遺跡調査研究報告一』（山口大学島田川遺跡学術調査団、1953年）
1960年、田中晃学長を団長として行われた山口大学と東京大学の合同調査による秋吉台観音洞遺跡出土の遺物も収蔵されている。
小野忠熙編『秋吉台観音洞一秋吉台観音洞遺跡学術調査報告一』（山口大学秋吉台観音洞遺跡学術調査団、1961年）
- 7) 山口県立山口博物館専門学芸員中野一人、山口県教育委員会指導主事森江直紹、同辻田耕次の3氏により資料の整理の協力をうけた。